

名君に学ぶ 人間学

仁を貫いた保科正之の 生き方が教えるもの

歴史上、名君と呼ばれる人たちがいる。彼らを名君と言わしめるものは一体何なのだろうか。

ここで紹介する保科正之は会津藩主として藩政を司る一方、徳川三代将軍・家光の遺命を頑なに守り、幼くして四代将軍になった家綱を支え続けた人物である。儒学に基づき、善政で江戸幕府の基礎を固めた中心人物でもあり、その無私の生き方は、名君と呼ぶにふさわしい。ともに保科正之に関する書物を著す作家の中村彰彦氏、三戸岡道夫氏のお話を通して、現代人の踏むべき道標を考えてみたい。



三戸岡道夫——みとおか・みちお

昭和3年静岡県生まれ。東京大学法学部卒業後、協和銀行副頭取を経て、作家活動に入る。本名は大貫満雄。著書に「保科正之の一生」「二宮金次郎の一生」「孔子の一生」「冀北の人・岡田良一郎」「大山巖—剛腹にして果断の将軍」「児玉源太郎—明治陸軍の巨星」といった伝記小説が多数。行員時代の経験を基にしたビジネス小説「修羅の銀行」「融資赤信号」「凄腕人事部長」など、偉人伝とビジネスの二つのテーマで執筆活動を続ける。

中村彰彦——なかむら・あきひこ

昭和24年栃木県生まれ。東北大学文学部卒業後、文藝春秋勤務を経て、文筆活動に入る。62年「明治新撰組」で第10回エンタテイメント小説大賞を、平成5年「五左衛門坂の敵討」で第1回中山義秀文学賞を、6年「二つの山河」で第111回直木賞を受賞。主に江戸期から明治期にかけて題材を取った小説、評伝、歴史エッセイの著書多数。「保科正之言行録」(中公新書)「名君保科正之」(文春文庫)などがある。



保科正之——ほしな・まさゆき

慶長16(1611)年～寛文12(1672)年。江戸前期の大名。二代将軍徳川秀忠の子で、三代将軍家光の異母弟。元和3(1617)年に信州高遠藩主保科正光の養子となる。寛永13(1636)年出羽国山形藩二十万石を拝領。同20(1643)年陸奥国会津藩二十三万石の藩主となる。慶安4(1651)年、家光の遺命により四代将軍家綱の後見人として幕閣に加わる。幕政の安定に貢献する一方で、会津藩主として藩政の基礎を確立する。(肖像画=土津神社蔵)

対談

中村彰彦 作家
三戸岡道夫 作家

名君を
名君たらしめるもの

三戸岡 私は三年前に保科正之本を出させていただきましたが、その時、中村さんのご著書に随分学ばせていただきました。きょうは教えを請いたいと思ひまして、お会いできるのを楽しみにまいった次第です。

中村 私もお会いできて光栄です。嬉しいことに、去年から保科正之が治めた旧高遠藩ゆかりの伊那市が生誕祭を始めましてね。今年が生誕三百九十七年目なのですが、伊那市と福島県の会津若松市、猪苗代町が中心になって三年後の生誕四百周年に保科正之の大河ドラマを実現させようとNHKに働きかけているところでもあるんです。

三戸岡 正之を顕彰する動きは徳川家でも見られますね。徳川宗家第十八代当主の徳川恒孝さんが会津藩主・松平容保の末裔というところもあって、同じ会津藩主だった保科正之には大変関心が高い。

中村 今年の戊辰戦争百四十年に合わせて、福島では奥州越列藩同盟参加諸藩の藩主の子孫を集めてパネルディスカッションを開く